

蒋祖慧氏インタビュー記録

——母・丁玲と平壤留学，中央戯劇学院崔承喜舞踏研究班の思い出

(早稲田大学非常勤講師) 金スノグ 整理・訳

[要旨]

本稿は2010年3月9日丁玲の娘蒋祖慧氏（元中央バレエ団副団長・『紅色娘子軍』創作メンバーの一人）のインタビュー記録である。主な内容は、幼少期を過ごした延安での集団生活、1949年春から翌年夏までの平壤崔承喜舞踊研究所留学（母の説得で朝鮮に行ったこと、留生活の様子）、1951年中央戯劇学院に開設した崔承喜舞踊研究班の回想および母との思い出で、御本人提供の写真を含む。丁玲の息子蒋祖林氏は著作もあり比較的知られているが、妹の氏については母娘の関わりも含め日本では殆ど紹介がない。近年再評価が進む崔承喜研究から見ても、従来注目されなかった中国舞踊界での崔の貢献について、愛弟子である氏の証言は貴重だろう。

筆者は近年、中華人民共和国建国初期の文芸界における“抗美援朝”（アメリカに抵抗し朝鮮を助ける）運動について調べているが、偶然諸資料から丁玲の娘・蒋祖慧氏がかつて朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）平壤に創設された崔承喜舞踊研究所に留学した経験があり⁽¹⁾、それが母丁玲の強い希望によるものであったと知った。

当時丁玲は創作上も崔承喜と些か関わりがあった。1950年10月末より、朝鮮戦争前線への志願軍派遣を機に、中国政府の強力な主導下に展開した抗美援朝運動は、国際主義を謳いつつ対内的には愛国思想教育を推し進めたが、それはのち言論界に一元的統制を築く布石を打った。周知の通り、建国後文芸界では「文芸講話」精神が改めて強調され、文学創作は次々発動される政治運動課題に従い、やがて硬直した政治評価のみが重視されるようになる。抗美援朝運動は言わば最初の大きな「課題」であり、政府の半強制的「呼び掛け」に応え、夥しい作品が生み出された。当時丁玲は中央宣伝部文芸處處長・『文芸報』主編・文協副主席・中央文学研究所籌備主任委員（のち初代所長）等要職に就く一方、余り知られていないこと

だが文芸界抗美援朝宣伝委员会主任委員を任せられ、党高級幹部の一人として運動を推進する立場にもあった。彼女は運動のごく初期から「任務」を全うすべく対外的な反米宣言に名を連ね、大規模デモや献金活動に率先して参加したほか、少数だが作品も書いた⁽²⁾。その一編である映画脚本「戦闘的人們（戦う人々）」（1951年2月『人民文学』第3巻4期初出）は未完の断片的作品だが、「命により」書いたもので、元は他の作家と集団創作で仕上げる予定であった⁽³⁾。興味深いのは、映画は当初、戦火を避け北京に滞在していた崔承喜を主人公にする計画であったことだ。この時崔は周恩来の計らいで中央戯劇学院に自身の舞踏訓練班（1951年3月開設、のちに舞踏研究班。略称舞研班）を設け、内外の学生を指導していた。残念ながら計画は実現しなかった⁽⁴⁾が、丁玲と崔承喜は蒋祖慧氏を通して不思議な縁で繋がっていたのである。

祖慧氏の平壤留学についてももう少し知りたいと念じていたところ、幸運にも李向東氏（『丁玲年譜長編』（以下『年譜』）『丁陳反党集団冤案始末』⁽⁵⁾等の著者。共著者でお連れ合いの王増如氏は丁玲

最晩年の秘書)の御協力により、2010年3月9日祖慧氏ご本人にお会いできた。氏は気さくで始終笑みを絶やさず、やや湖南訛りのハスキーな声で、午前中から昼食の時間まで費やしお話し下さった。筆者は元来中国バレエの歴史に疎く、付け焼刃の知識で証言の貴重さを十分お伝えできるか心許ないが、本記録がその価値を損なわぬよう祈りつつ大方の御教示を請いたい。

ここで祖慧氏の略歴を紹介する。1934年10月生まれ。父は「丁玲を裏切った叛徒」として後々指弾の的となる馮達だが、作家自身の回想を含む多くの先行研究があり、本稿の主旨にも関わらないためここでは立ち入らない。出生後まもなく兄(蒋祖林、1930年生まれ)と共に湖南の外祖母に預けられる。38年8月兄妹ともに、すでに延安入りしていた母・丁玲の元へ引き取られ、延安保育院に入る。49年春、平壤の崔承喜舞踊研究所に1年余り留学。当時中華人民共和国政府はまだ成立しておらず、商務代弁処が実質外交機関の役割を果たしたが、舞踊研究所の中国人留学生もそこに寄宿したという話は興味深い。50年夏、朝鮮戦争勃発により帰国、中央戯劇学院舞踏団入団。翌年3月より崔承喜舞踊訓練班で指導を受ける。52年戯劇学院に戻りダンサーとなる。53年中国青年芸術団団員としてブカレスト世界青年交流祭とポーランド、旧東ドイツ巡演に参加。54年北京舞踏学校入学。翌年共産党入党。56年8月モスクワ国立戯劇学院留学、以後バレエマスター(中国語では編導)の道を進む。61年帰国後、北京舞踏学校実験バレエ団(のち中央歌劇舞劇院、現中央バレエ団)編導、中国革命バレエ聖典の一つ『紅色娘子軍』(1964)創作に従事⁽⁶⁾。文化大革命中に江青に批判され、北京郊外の紅芸五七幹校で労働改造。77年復職後、魯迅小説を改編した『祝福』(1980)等多くの創作バレエ劇に携わりながら、中央バレエ団副団長等を歴任。文字通り中国バレエの草創期と共に歩まれて来た。95年退職後も現

在まで舞台創作で活躍されている。

文中のハングルは祖慧氏自身の言葉による。なお中国語・韓国語引用文献は拙訳により、敬称は特に必要がない限り省略した。

私は延安で成長した

——兄の蒋祖林さんには幾つか著書がありますが、日本の丁玲読者の多くは妹の祖慧さんがどんな方かよく存じ上げないと思います。

兄は子供の頃から賢く、物分かりも良くて大人びていたの。お話も上手かった。私は兄と違いボンヤリしていた(笑)。二人共小さい頃は湖南の外祖母(丁玲の母余曼貞、1878-1953——訳者注、以下同)の家で過ごしました。1938年8月、私と兄はまだ18歳だった叔父(余肅臣、のち伍陵に改名)に連れられ延安まで行きました。当時叔父さんは大変でしたよ。私達を連れて国統区を通じたのですから。

延安到着後、私は延安保育院に入り、兄は烽火劇団の陳明叔父さんの所に行きました⁽⁷⁾。兄は小さい時から本をたくさん読み、物覚えが良かった。烽火劇団では大勢の団員の前で物語を聞かせたのよ。『三国演義』や『水滸伝』『七侠五義』なんかをね。一番小さいのに、団員達は皆車座になって聞いていました。兄は割に大人びていたから、母の周囲の人達とも親しかった。私はボンヤリしていたけれど(笑)。

私が入ったのは延安で最初にできた延安第一保育院です。これには経緯があり、1938年に鄧穎超・李徳全・宋慶齡達が日本の侵略によって増えた孤児や浮浪児を救済するよう提起し、重慶などに戦時保育院ができました。一部の地域では受け入れた子供が大きく、十歳位の子もいたので小学校も作りました。戦時児童保育院と言って、多くは革命に参加したり前線で戦った子供達で、私達の学校にも来ました。上部の管轄組織は戦時児童

保育会で、宋美齡が主席でした。当時国民党も一部経費を負担し、決まった割合で各児童の食糧を提供していました。私の母もこの保育分会に参加しています⁽⁸⁾。

その後日本軍の爆撃で⁽⁹⁾安塞白家坪に一時避難し、それからまた延安に戻りました。安塞にいた時、母が一度会いに来たことがあります。多分この時江青の機嫌を損ねたのでしょう。文革後、山西省嶂頭に母を訪ねた時⁽¹⁰⁾訊いたことがあります。私が「軍代表が言ったの。どうして江青が私をやっつけたか。それは母さんが江青と毛主席の結婚式に参加しなかったからだって」というと、母は「毛主席が宴席を設け招待されたことがあった」と。当時母は私に会いに行くため馬を借りたそうです。延安から安塞まで90里余り（約45km）もありましたから。保育院は小草溝門にあり白家坪の保小（延安保育院付設小学）に近かった。その頃馬一匹借りるのは大ごとだったから、母はしばらく迷いました。結局「安塞に行くのは大変、毛主席に会うのはまだ容易い」と思い私に会いに来ました。実はその時私は眼病に罹っていて、母は保育院に呼び出されていたの。

母が言うには、会ってみたら私はボンヤリ自分を見てるだけ、無表情で他の子達と変わらない。母は「変ね、自分の母親に会ったのに、もっと違う反応じゃない？」、そこで「あんたホントに祖慧なの？」と。私は「そうよ！」（笑）。母は「こんな態度はおかしい」と思ったのね。今考えると、それまで母との接触が余りに少なかったってことでしょう。小さい頃から祖母が私の面倒を見ていましたから。翌朝、母は帰る前また会いに来ました。私はまだ寝ていて、目の周りは眼ヤニだらけ。それを見て多分辛かったのでしょう、「もう会いに来ないわ」と院長に眼を清潔にするよう頼んだそうです。当時状況は厳しかったから、どうしようもなかった。安塞で母が面会に来たのはただ一度だけ、母子の接触は少なかった。

私達保育院の仲間はすごく面白くてね、ほとんど皆両親がいなくて、迎えにも会いにも来ない。だから親に対する気持ちは薄かったけど、子供同士は兄弟みたいに分け隔てがなかった。今でもはっきり覚えています。夏に行水をするのにね、皆小さなベンチの上に立ち、男の子も女の子も素っ裸になる。片方に脱いだ服を置いて、もう片方に着替えを置くの。それから保母の先生が盥で一人ずつ水をかける。かける度に皆「わーっ」と大喜びで洗うの（笑）。終わると先生が「皆さん、服を着て！」と声をかける、すると皆どれでも好き勝手にとって着るの、どれが自分のか全然気にしない。そんな訳で、保育院の子供達は皆割に単純だったかも。親なんて余り気にしませんでした。

延安にいた時も母は会いに来たことがありました。時には連れ帰って何日か過ごしたこともあったけど、そういう時間はやはり少なかった。

保育院はその後私達を保小に移しました。保小はその後もずっと安塞の白家坪にありましたが、保育院は1940年小草溝門から延安市宝塔区李家窪に戻りました。

母の説得で朝鮮へ

——お母様とどのように相談して朝鮮行きを決めたのですか。

1948年末に母がブタペストの世界民主婦人大会に参加した当時、私はまだ晋察冀辺区聯合中学で学んでいて、後から陳明叔父さん達と一緒に瀋陽の魯芸⁽¹¹⁾に行きました。当時魯芸に陳錦清⁽¹²⁾という舞踏の先生がいました。張庚⁽¹³⁾副院長の夫人で元は延安魯芸出身、当時若くして『白毛女』の張二嬸を演じたこともあり、秧歌（田植え踊り、主に中国西北部農村に伝わる民間舞踊）が上手でした。この人が朝鮮の崔承喜舞踊研究所で6カ月朝鮮舞踊を学んで帰国し⁽¹⁴⁾、ちょうど魯芸で教師になった頃私が到着したわけです。母は張・陳夫妻

と親しかった。魯芸には文工団があり、私と同じ年頃の子達が陳錦清にダンスを学んでいました。私もレッスンの時見に行ったりして、でも余り真面目じゃなく、ただくつついて遊んでいたの。

この時魯芸に文士楨という人が来ました。この人は東北局駐朝鮮商務代弁処主任⁴⁶でした。彼は陳錦清に会いに来たのですが、多分母とも知り合いました。皆でお喋りしている時、母が突然「ねえ、私の娘も朝鮮に連れてってダンスを習わせて頂戴！」と言ったの。すると文士楨も「いいよ！」って（笑）。

当時はそうした手続は簡単でした。何でも供給制でしたから、今みたいに複雑じゃなかった。ある所に行けば、その人の名で一人分多く食糧や衣服・日用品が支給される。「軍事共産主義」ですから。後から母は「『処刑してから事後報告』よ、相談する手間が省けるじゃない」なんて、私を説得し始めた。私はといえば、行きたくなかった。あまりに突然でしたから。

なぜかという、私達延安出身の子供達はずっと学校で生活していたでしょう？ 延安を離れ45年末張家口に着くと、母は私を蕭三（詩人1896－1983）の家に置き、自分は土地改革をしに行った。親子の関係は薄かった一方、学校生活の雰囲気にはすごく馴染んでいました。47年前半は阜平県の光明小学校にいました、母が阜平に居ましたから⁴⁷。その年後半の7月に私は晋察冀辺区聯合中学に行きました。この学校は確か46年に張家口から撤退してきたと思います。当時は河北省平山県西黄泥村にあり、西柏坡から十里位（約5 km）でした。現在西黄泥と東黄泥はどちらもダムになったそうです⁴⁸。

晋察冀辺区聯中は「従軍学校（原文は随軍学校）」とも言ってね、やはり供給制で学校に寄宿しました。7月はまだ正式な授業がなく、学校は皆に晋冀魯豫軍劉伯承部隊に送る綿入れ作りを割り当てました。「前線を支援できる」って皆すご

く喜んでね。最初感じたのは「まあ！中学に行ったら人に服も作ってあげられるのね！」と。今私が離休幹部（1949年以前に革命に参加した退職幹部、一般の退休幹部より年金額や医療保障面等で格段に優遇されている）待遇を受けているのは、こんな経緯があるからなのよ（笑）。

この「従軍学校」では時々こうした任務があると皆かかりきりで働きました。その頃私は不器用でね、綿を均すのも平らにできなくて。そしたら「もういいから、縫製をやって！」と言われて。そこでひとつひとつ縫うけど、それも上手くない。何人かの上級生や農村出身の年嵩の子達は皆手伝ってくれました。後になると「いっそボタン穴あけをやって！」と。穴あけはナイフでひとつずつ刺すだけ、割に簡単でした（笑）。私はこの学校から東北に行ったのです。

当時私達は一つの考えがありました。つまり「我らは皆革命の後代、将来後を継ぐのだ」、一心に「解放したら何をしよう？」と。みんな将来工業をやりたいと思っていました。なぜなら建設しなきゃならないでしょう？ 私は化学が好きで、化学をやりたいと思っていました。クラス担任が化学の先生でしたから。

それなのに母は私にダンスを学びに行くよう説得しました。どう説得したかという、母はソ連で初めてバレエを見た時のことを話したの。ウラノワ（ガリーナ・C・ウラノワ、1910－1998）の写真やシモノフ（コンスタンチン・M・シモノフ、小説家・劇作家、1915－1979）のサインを見せてくれてね。母が見たバレエ劇は二つともプーシキンの作品を改編したもので、一つは『バフチサライの泉』（別名『涙の泉』）、もう一つは『ピョートル大帝』（同『青銅の騎士』）でした。母の話では『ピョートル大帝』はどんな仕掛けだったのか、舞台全体に水を湛えていたそうです。それから『涙の泉』でウラノワがどんなに美しく、踊りが素晴らしかったか話してくれました。更には

「新中国が出来たら、必ず文化を発展させなくちゃ。工業を発展させるだけでなく、文化も発展させなければ。ダンスだって必要になるわ」と。実のところ、母もダンスにバレエと民族舞踊の違いがあるなんて知らなかった。ただダンスをやらなければならぬと考えていました。文士楨に会って、朝鮮に勉強に行かせるいいチャンスと思って私を説得したのね。

——お母様はそれまで崔承喜の舞台を見たことがあったのですか。

見たことはなくて、ただ陳錦清が戻って来た時話を聞いたのです。彼女によると、崔承喜は有名な舞踊家で、30年代に英・米・仏等を巡演し、その後は朝鮮舞踊の研究に傾注した。41、42年には中国にも公演に来て、梅蘭芳や韓世昌とも親友で、京劇や昆曲から多くの舞踊を学んだ²⁰⁸。事実上こうした伝統演劇の舞踊を取り入れた最初の舞踊家は崔承喜である、と。

母はこうして私を長いこと説得しました。私は他にも理由があると思うの。それは母自身も芸術が大好きで、ダンスが大好きだったということです。それから母は周囲の人にも私を説得させた。例えば陳明叔父さんや作家の李又然（1906－1984）も私を説得しました。あとは、母はもしかすると私という人間がそんなに科学的頭脳を持っているとか、勉強好きではないと思ったのかも。むしろピョンピョン飛んだり跳ねたりするのが好きで、頭も単純だと思ったのかもしれない（笑）。それで結局、私は朝鮮に行きました。

平壤での留学生活

——いつ頃行ったのでしょうか。どのように行ったか御記憶ですか。平壤の印象は。

多分1949年3月頃、文士楨と行きました²⁰⁹。経路

はどうだったか、はっきり覚えていませんが、多分汽車で新義州を通り平壤まで行ったと思います。

朝鮮に着いてすごく嬉しかったのは鄭律成²¹⁰に会ったことです。彼は当時朝鮮に帰国して朝鮮人民軍協奏団団長でした。彼は二つの国の軍歌を作ったわね。一つは八路軍の歌（「八路軍進行曲」）で「進め、進め、我らの隊伍……」という歌、もう一つは朝鮮人民軍の歌（「朝鮮人民軍行進曲」）です。素晴らしい曲「延安頌」も書きました。鄭律成は大変立派ですよ。後に彼は再び中国に戻り、中央楽団（現・中国交響楽団）創作室で働きました。

当時は夫人の丁雪松も朝鮮に居て、新華社駐平壤分社社長になりました²¹¹。彼女も全くすごい人、後で女性大使になったわね。鄭律成とはそれまで面識はありませんでしたが、延安の人と言うとまるで親戚の叔父さん叔母さんのようで、特別親しみを感しました。だからすぐ「丁雪松おばさん、鄭律成おじさん」と挨拶したの。

祖慧氏に贈られた崔承喜署名プロマイド
（蔣祖慧氏所蔵）



「蔣祖慧同志 在北京 崔承喜 一九四九年十二月二十日」とある。

あとの話ですが、江青に会った時なぜ私が少しばかり無作法だったか²²という、お互い延安出身だったから。延安の人であれば同じ家族だと思った。「革命の大家族」というでしょう？ 特別親しみを感じたのね。子供の頃の同級生は今も同じ、保小の人と言えば皆何でも話すし、何の気兼ねもない。確かにちょっと普通とは違いますね。

鄭律成は私が朝鮮にダンスを習いに来たと聞いてすごく喜んで、とても親切にしてくれました。ある老音楽家を紹介してくれて、私に伽耶琴を習わせたの。「朝鮮舞踊を学ぶなら、朝鮮音楽も分からなくちゃ」と言ってね。伽耶琴のケースを背負ってその先生の家レッスンに行ったこと、今でも覚えています。

平壤で覚えているのは大同江、モランボン（牡丹峰）ですね。モランボンは大同江沿いの小山でやや平たく、当時はまだ公園ではなかった。出入口のない、ただの原っぱでした。印象深いのはメーデーの時、数人の朝鮮の友達と代弁処の人達と一緒にピクニックに行ったこと。朝鮮には食べ物飲み物を持って野原に遊びに行く風習があるでしょう？

——崔承喜舞踊研究所で学ばれた状況を教えてください。当時研究所は今の玉流館という有名な冷麺レストランの場所にあったそうですが。

舞踊研究所の具体的な場所はわかりません、当時地図を見なかったから。私は代弁処に寄宿していました。そこは研究所から近くて歩いて行けましたし、寝泊まりできる施設があったの。中国から来た留学生は皆そこに寄宿しました。学生は多くなかったから、皆泊まれたのね。

当時もう一人私と一緒にダンスを学んだ人がいました。阿麗と言って、私と同じ位の年でした。彼女は東北秧歌が特に上手で、やはり幹部の子弟でした。彼女はその後瀋陽遼寧バレエ団編導にな

り『梁山泊と祝英台』（1983）を振付けました。私より数か月遅く朝鮮に来て、一緒に勉強しました²³。

私の前には確か陳錦清の他に二人いたと思います。二人とも安東の芸術団から派遣されて来た。うち一人は私より先に来て先に帰国しました。于穎²⁴と言って私より年上、建国後は北京に配置され、ずっと中国歌劇舞劇院に居ました。やはりダンサーです。お年を召されてから民族舞劇『紅樓夢』を創作し、著名な舞踊家陳愛蓮（1939-）がずっと出演しています。私は一昨年彼女の舞台を見に行きました。

ダンスの授業は幾つかに分かれていて、朝鮮舞踊・バレエ・ドイツのモダンダンスがありました。このモダンダンスは「신흥무용（新興舞踊）」と言いました。南方舞踊は「남방무용」と言い、崔承喜が以前東南アジアに行って創作したもので、現地の様々な舞姿を集めて教材を作り、手と体の動き（原文は動作。以下文脈により「動き」「動作」とする）をトレーニングしました。それがインドのものか、インドネシアか、或いは何か見分けが付かないかもしれません。というのは、これらを全て吸収しているからです。南方舞踊の手の動きは大変美しく、彼女が創作した「菩薩」²⁵にはそうした手の動きがたくさんあります。

リズムの授業（原文は節奏課）もダンスの一つです。つまり学生に自由な感覚でダンスを作らせる。今思うとそれが創作の第一歩だったようです。例えば崔先生が（手でテーブルを叩きながら）「一、二、一、二」とリズムをとり、それに合わせて動きなさいというと、自由に動く。朝鮮舞踊でもいいし、南方舞踊をやってもいい。続いて（テーブルを打ち）「一、二、三」とこのリズムで踊らせる。今度は（やや速く叩きながら）「一、二、三、四」、このリズムでやらせます。これも一つの授業で、色々な音楽のリズムに従ってダンスを作る。ただそれは一つの纏まった作品で

はなく、学生に異なるリズムで自由にダンスをさせるの。立って回転してもいいし、朝鮮舞踊を踊ってもいい。でも必ずリズムに合わせなければならず、とても厳しかった。

今思い返すと、これが恐らく創作というものの思考の道筋を啓発してくれたのかなと思います。当時はそこまで考えませんでした。つまり、これは私が後日ダンスの創作に進んだことと関係があるかも知れない。崔承喜は踊りに優れていただけでなく、自ら多くの演目を作りました。振付家であると同時にダンサーだった。私は当時薄々気付いたのかもしれませんが。自分は崔先生のように踊りと振付両方ができるはずはない、と。この考えは誰かに言われたのではなく、ただ知らず知らずの内に感じたことですが。

平壤にて（蔣祖慧氏所蔵）



前列左から丁雪松、文士禎、崔承喜、蔣祖慧、金白峰（崔の弟子）、安聖姫。後列左から安漢（崔の夫）、鄭律成。同じ写真は注②『向着太陽歌唱：解説鄭律成』102頁他にも紹介されている。なお、ここでは不鮮明だが、後ろの旗に「北朝鮮崔承喜舞踏研究所恵存 宏揚民族芸術 魯迅文芸学院第四団敬贈」とあるのが、注②『崔承喜——激動の時代を生きたある舞踊家の生涯と芸術』所載で恐らく同時に撮影したと思われる別のショットから分かる。同書248-249頁参照。

——当時中国人学生は朝鮮での留学生活で困ったと思うことはありませんでしたか。

生活面で困ったと感じたことはなかったです

ね。供給制ですから。代弁処の皆と一緒に食べ、衣類も中国から支給されました。「革命隊伍」の中ではどこへ行こうと、名前と檔案をそこに置けば一人分の衣食が支給されました。一体どう管理したのか、どんな手続だったかは分かりませんが、当時はただそれが当たり前と思っていました。どこでも行った先で配給を食べる。だから「大家庭」と言うのでしょうか？ 朝鮮に勉強しに行った時も同じです。授業に出たあと代弁処に戻って食事し、また授業に行く。時には午後リハーサルをしたり、私達二人だけで処内で本を読んだり、勉強したりすることもありました。

——仲良くなった朝鮮の友人はいましたか。平壤の他に行ったところは。

朝鮮で親しい友人はいませんでした。一年ですぐ帰国し、期間が短かったから。一緒に授業を受けたクラスメート同志の仲は悪くはないけど、それほど付き合いもなかったですね。私達中国人留学生はダンス以外、朝鮮語を学ぶ授業もなく、朝鮮人学生と宿舍も別でしたから、言葉はあまり身に付きませんでした。代弁処で少し教わりましたが、特に先生を招いたのでもなく、処員にちょっと訊いて教えてもらう程度でした。その後代弁処に若者の一団が来て、彼らは丁雪松が呼びかけ共産党側に吸収した華僑でしたが、処内の職員がその人達に授業や講演・解説をしたりする時、私達も一緒に聴講に行きました。

ダンスの授業では意思疎通の上で大きな問題はありませんでした。体の動きですから、聴いて分かりますし、見て分かります。例えば「하나둘세, 둘둘세……시작! (一二三, 二二三……始め!)」と言えば、意味は今から始めます、真似をなささいということ。「시작! 같이합시다! (始め!一緒にやりましょう!)」「좋습니다! (よろしい!)」とか、簡単な言葉は今も覚えています。

当時はもっと多く覚えていた筈ですが。やり取りするうち次第に覚えました。崔先生が褒めたり、叱ったり、或いは直してくれる時は全て理解できました。

平壤の他にいった所はありません。平壤で時々遊びに出かけたりしただけ。ある時、多分朝鮮の国慶節、つまり建国記念日かしら。確か9月頃、かなり暑かったのだ⁹⁹。大きな広場で金日成がパレードを観閲した時、私達も崔承喜の隊列に参加しました。片手に短い繻子を持ち、朝鮮舞踊を踊りながら金日成の前を行進しました。今も覚えています。

——結局どのくらい学ばれたのですか。いつ帰国なさったのでしょうか。

一年余りです。朝鮮戦争が起きるとすぐ阿麗と一緒に帰国しました。多分50年7月初旬でしょう。実を言えば当時のことはよく覚えていない。戦争が始まると急いで帰国しなさいということになったので、何にも分かりませんでした。

中央戯劇学院崔承喜舞踏研究班のこと

——帰国後、中央戯劇学院で崔承喜舞踏訓練班に参加された時のことを教えて頂けますか。資料によれば¹⁰⁰、崔承喜は朝鮮戦争が勃発した時ソ連滞在中で、8月に帰国、翌9月に研究所が爆撃されたために避難し、11月に中国へ来たとあります。彼女は東城区香餌胡同に滞在したそうです。蒋さんはいらしたことがありますか。

行ったことがあります。今もその胡同はあるでしょう、地安門の辺りで戯劇学院の近くです¹⁰¹。崔承喜は北京に来てからずっとそこに滞在していたと思います。

私は帰国後、中央戯劇学院舞踏団に入りダンサーになりました。その後崔承喜が北京に来るとま

もなく、一部の歌舞団例えば中央戯劇舞踏団や北京人芸舞踏団（両者はのちに合併し中央歌舞団）等の人達を組織しました。その中に于頔と私もいました。それから崔先生は伝統演劇、中でも昆曲のベテラン芸術家に頼んで彼らから動作を学びました。これが崔承喜の中国における最大の貢献といえます。彼女は元々40年代から中国の伝統演劇や舞踊に興味がありましたが、北京に来た今もっと良い機会ができたわけです。そこで彼らに動作を教わり、私達にそれを学ばせ、更にそれらを整理して教材を作りました。まず花旦・青衣・小生から始めました。当時最も有名だった北昆の旦角（女形）韓世昌や小生（若い男役）白雲生（1902-1972）を招いて演じてもらい、終わると後について学び、それから「他にどんな動作がありますか？」と質問します。こうしてずっと間断なく訊ねては演じ、その後で崔先生はこれらを教材に編集しました。舞研班ができてからも、彼女はずっと京劇界の役者を招いて動作を教わった、京劇中の舞踊に関わる部分を教わったのです。私は昨年（2009年）初めて訪韓し、崔承喜を記念する会でも見ましたが、彼女が京劇の音楽を用いて創作したダンスは全く京劇の動作でした。

1951年3月舞研班が開設すると、部隊やモンゴル族など少数民族も含め、全国の多くの機関から派遣され学びに来ました。更には中学や大学から試験で受け入れた人も一部いました。舞研班は二クラスに分かれ、一つは朝鮮族クラスで延辺等から来た人が多かった。もう一つは全国各地から来た漢民族クラスです。全体の人数ははっきり覚えていませんが、皆一緒に学びました。

舞研班は52年夏の卒業時、北京と上海で巡回公演をしました。プログラムの一つは様々なダンスの基本動作で、もう一つは幾つかのダンス演目でした。その中には朝鮮舞踊とモダンダンス（新興舞）のほか中国舞踊が加わり、青衣・花旦・武旦・小生に分かれていました。つまり新しい教材

が増えたわけですが、やはり易しい動きから難しい動きに進むものでした。同時に幾つかの演目を踊りました。朝鮮舞踊のほかに中国のモンゴル舞踊・ウイグル舞踊もありました。学生の中にこうした少数民族舞踊を踊れる人もいたので、崔承喜は皆に互いに学ばせ、自分も手助けして整理したり、創作を加えて舞台に上げたのです。この他にはウクライナの踊りがありました。これは崔先生達が元々朝鮮でソ連の人から教わったもので、私達にも教えてくれました。崔承喜自身も「乗風波浪」を踊りました、老夫に扮してね。「菩薩」も踊った。それから彼女が当時創作した演目も二つ踊りました。一つは抗美援朝をテーマにした「母」で、子供を爆撃で失ったある母親の怒りを表現したものの。もう一つは「遊撃隊」、安聖姫演じる遊撃隊員が米兵と渡り合った後、遊撃隊が登場して米兵を縛り上げ、やっつけるというものでした⁹⁴。

その後舞研班の学生は各地に配置され、ほとんど全国にいます。中央歌舞団から来た人は大部分北京に残り、のち歌舞団から分かれた中央歌劇舞劇院にも卒業生がいました。北方昆曲劇院にいった人も少数いて、有名な女優李淑君⁹⁵も舞研班出身です。彼女は当時試験で入ったのですが、最初は舞研班で昆曲の老生（鬚を付けた中高年男性役）から色々習い、それから唄い（原文は唱、伝統演劇での歌唱）を学んだ。謝晋の映画『牧馬人』（1982）主演女優叢珊（1962-）の母も崔承喜に師事しました。父の叢兆桓（1931-）も舞研班に来て、崔承喜から直接は教わりませんでしたが、両親とも後に北昆で演出家になりました。

上海歌舞団の著名なダンサーでのち編導になった舒巧⁹⁶もここで学びました。始めは新安旅行団つまり新四軍の所でダンスを学んだ人です。

中央舞踏学院第二代院長の李正一⁹⁷も舞研班出身です。彼女は北京舞踏学院が開設したとき古典舞踊を教えていましたが、この古典舞踊とはソ連の専門家の要求に基づき、バレエの方法に沿って

整理した中国舞踊です。しかし李正一が私に言ったことは、多くの動作の中でも崔承喜から学んだことが、後に自分が教鞭をとる時大変役立った、と。結局崔承喜の所で多くを学んだわけです。

編導と言えば、わが中央バレエ団には王世琦⁹⁸という嘗て『魚美人』（1959）に参加した演出家があります。彼も立派で1980年代にオーストラリアに招かれ華人の舞劇『龍騰澳州』（1988）を組織しました。李鵬総理がオーストラリアを訪問した時、その舞台を見て大変喜んだそうです。

総じて言えば中央歌舞団の何人かの編導、例えば現在中央戯劇学院で話劇の役者に「形体」を教えている田正坤⁹⁹らも含め、舞研班は大勢の人材を輩出しました。更に王詩英¹⁰⁰もいます。彼女は当時戯曲実験学校の学生でしたが、王瑤卿（1881-1954）校長が彼女を崔承喜のもとへ遣って学ばせました。王瑤卿は古い価値観に囚われない開けた人で、伝統演劇の役者もダンスを学ぶ必要があると考えたんですね。彼は崔承喜を知っていたから。崔承喜は梅葆玖（梅蘭芳の九男で梅派継承者1934-）とも繋がりがあり、彼も舞研班に来て教えた事があります。

崔承喜舞研班の貢献

先ほど崔承喜の南方舞踊に触れましたが、彼女の考えは全て朝鮮舞踊を発展させるためだったと思います。だから彼女の踊りには手の動きが多かった。体全体の動きもありますが、通常床面から始め、終わると立ち上がり、それから移動、更にターンが加わる。全て易しい動きから難しい動きに進みます。これらは全て自ら創作したものです。

舞研班の同級生高金榮¹⁰¹は崔先生をよく受け継いでいます。彼女はのちに甘肅省蘭州に配属され、他の人と共に敦煌の踊りを整理しました。高金榮は崔先生の影響、特に南方舞踊の教材から多く啓発を受けたと私は思います。敦煌舞踊の造詣を深め、力を合わせて豊かな敦煌舞踊教材を創り

上げた。現在北京舞蹈学院には敦煌舞踊専門の授業があります。

舞研班の同学は何人もの編導を輩出し、みな優秀です。崔承喜は開けた考えの人で何でも学びましたが、目的は朝鮮舞踊の発展でした。本当に立派です。初め日本でモダンダンスとバレエを学び、その後アメリカ公演ではモダンダンスが増えました。昨年韓国の記念会で崔承喜創作のモダンダンスを見ましたが、一羽の鳥が自由を求める姿を描いたものでした。それは当時朝鮮が日本の統治下で自由を奪われていた様子を寓意したものと感じました。鳥が飛び立とうとして押さえつけられ、それでもまた飛ぼうとする。

崔承喜の舞研班における最大の功績は、自分のものを中国に持ってきたこと、次に中国の伝統演劇と舞踊を整理したこと。私自身が、後になってなぜ民族バレエに携わることができたか、つまりバレエと民族的な要素を結びつけられたか、それはやはり舞研班で本当にたくさん伝統演劇のものを学んだから。もちろん舞研班のあと中央歌舞団でも色々学びましたが、舞研班にいた時の方が多く学んだように思います。崔先生は当時武技の役者まで招いて私達に習わせた。例えば「扈家莊」の扈三娘の起霸（出陣に臨んで武芸を誇示する動作）も学びましたし、「霸王別姫」の虞姫の舞剣や、更には太極剣など全て学びました。どれも当時の有名な役者を招いて教わったのです。

最近韓国では彼女を記念し、私達中国の教え子もそうした活動に招かれるようになり、私も昨年参加しました。参加した仲間はみな、私達も崔承喜の中国舞踊への貢献をきちんと広めるべきだと感じました。中国での最初の弟子・陳錦清の貢献も大きいですよ。彼女は後に北京舞蹈学校初代副校長を務め、党幹部で実務家でした。舞蹈学校設立には彼女が具体的な仕事をこなした。ソ連の専門家と共に教員を育て、教材を研究しました。彼女は秧歌踊り出身で党に育てられた人であり、聡

明で芸術的素養も素晴しかった。陳錦清についても記録すべきだと思うわ。

——抗美援朝運動の時、丁玲は映画脚本「戦闘的人們」を書きました。当初崔承喜が主役を演じる計画だったそうです。お母様から何かお聞きになったことは。

そのことは知っています。確か崔承喜と安聖姫双方に演じてもらう計画と聞いた気がします。でも具体的に作品を見てないし、書き上げたかも知りません。母がこの作品について何て話したかは余り覚えてないわ。ただ母は崔承喜の踊りが大好きでした。中でも「乗風波浪」、仮面を被って男に扮し、高らかな朝鮮の音楽に合わせて踊る。母は心から敬服して「女性が自分でこんなダンスを創作し踊るなんてすごい」と言っていました。

——脚本は書きましたが、断片的で未完成のようなものです。映画も結局撮らなかった。理由は分かりませんけれど。

母は途中で止めてしまったのかも知れない。脚本をどう書くかよく分からなかったのかも。経験がないから。ほとんど初めてのシナリオでしょう？ カメラワークの用語なんてよく知らなかったからじゃないかしら。分かりませんが、政治的な理由ではないでしょう。あの頃政治的な問題はあり得ない。母は他のことで忙しかった。当時崔承喜も舞訓班で忙しく、母もそれ以上力を割けなかったのでしょうか。母はダンスには大変興味があったから、書く気ならきつと書いた。でも母本人は必ずしも満足しなかったでしょう。もし崔承喜を主人公にするなら、彼女をもっとよく知る必要がありますが、当時そうした可能性はなかった。母自身も断念したのでしょうか。これは私の分析で正しいとは限りませんけれど。

母の崔承喜に対する印象はとてもよかった。私は当時母と同居しておらず、普段は戯劇学院に住んでいました。土曜も出勤で、日曜しか家に帰らなかった。だから母と話す時間は殆どありませんでした。

——蒋先生、本日はどうもありがとうございます。
した。

祖慧氏自宅にて、氏と筆者



インタビューの合間、祖慧氏は長年大切にされているアルバムを見せて下さった。保育園・保小のスナップ、お下げを垂らした少女時代の氏と母が頬を寄せる睦まじい姿など他の文献で見かけたことのない貴重なものもあった。また氏は崔承喜から丁玲母娘にそれぞれ贈られた署名入りプロマイドと、更には1951年のニュース映像『中央戯劇学院崔承喜舞踏研究班』までわざわざ複写し御恵投下さった。映像は舞研班設立当初のもので「教室等は狭かった、あとで広くなったけど。学生のレベルもまだ高くないの」と言を添えられた。時を経てはやけてはいるが、崔自身の指導場面の他、安聖姫が「長鼓舞」を舞うシーンも収録されており、大変貴重な50年代の崔親子の映像には違いない。氏の御協力に再び感謝したい。

【注】

- (1) 崔承喜 (1911-1969?) : 朝鮮出身で、戦前戦後を通じ日本・中国・欧米等で活躍した舞踊家。石井漠にモダンダンス・バレエを学び、朝鮮で舞踊研究所を設立、公演活動の傍ら各地の舞踊を採集研究し独自の演目を創作した。中国・朝鮮で後進の育成にも力を注ぎ、朝鮮舞踊を体系的に確立した。戦後北朝鮮にわたり1946年9月平壤に舞踊研究所設立。政府要人として重用されたが66年失脚、以後消息不明となる。近年韓国を中心にその行跡を再評価する動きが出ている。文中の安聖姫 (1932-?) は娘で、同じく舞踏家として活躍した。主な参考文献は朴祥美「崔承喜研究の動向と資料紹介」『高等研究所紀要』第2号、早稲田大学高等研究所、2010年3月参照。祖慧が崔に師事したことは、後出の丁玲『年譜』や夫・陳明との書簡集『書語』北京図書館出版社、2004年に見える他、陳明のメモワール「丁玲与学舞踏的女兒」『舞踏』第6期、1988年6月や「蒋祖慧：我与母親丁玲」『晚報文萃』第12期、2003年12月にも紹介がある。崔側の資料では、金恩漢・小西政捷「イデオロギーと創作舞踊伝統——北朝鮮の舞踊家・崔承喜をめぐって——」『Working Papers No.12』立教大学アジア地域研究所、2004年12月に見える。金には専著『崔承喜の舞——継承と変容』民俗院、2008年（原文韓国語、署名金采媛）があり、崔の中国舞踊界への貢献にも触れている。日本語のものでは小林直弥「崔承喜の足跡と創作舞踊への考察——中国と中央戯劇学院における資料を中心に——」『日本大学芸術学部紀要』47、2008年3月を参照されたい。
- (2) 拙稿「“抗美援朝” 時期丁玲研究——以〈寄給在朝鮮的中国人民志愿軍〉与〈寄朝鮮人民軍〉爲中心——」『韓中言語文化研究』第17輯、2008年11月。
- (3) 「我与戯劇（代序）」6頁、『丁玲戯劇集』、中

- 国戯劇出版社，1983年。張炯主編，蔣祖林・王中忱副主編『丁玲全集』第9卷，河北人民出版社，2001年，161頁。
- (4)前掲『丁玲全集』第11卷，100～101頁。
- (5)王增如・李向東編著『丁玲年譜長編』天津人民出版社，2006年。李向東・王增如著『丁陳反党集团冤案始末』湖北人民出版社，2006年。
- (6)ここまでは『中国芸術家辞典』現代第二分冊，湖南人民出版社，1981年，408頁参照。
- (7)『年譜』によると延安到着後，祖林は延安保育院の付設小学（略称保小），祖慧は保育院に入った。『年譜』上巻，144頁。当時丁玲は西北戦地服務団主任，のちの夫・陳明（1942年2月15日結婚）は服務団の宣伝股長として活動後，延安に戻っていた。その後共に体調不良のため延安に残り馬列学院に入る。翌年9月陳明が烽火劇社に移ると丁玲は息子を一時彼の元に預けた。陳明口述，査振科・李向東整理『我与丁玲五十年——陳明回憶錄』中国大百科全書出版社，2010年，66～68頁。
- (8)戦時児童保育会については古為明「中国戦時児童保育会術略」中国社会科学院近代史研究所編輯『抗日戦争研究』近代史研究雜誌社，2006年第4期，16頁，<http://jds.cass.cn/Article/UploadFiles/200804/20080402140804896.pdf>（2010年10月3日最終アクセス，以下同）参照。古によると1938年「7月4日，（戦時児童保育会——引用者注）陝甘寧辺区分会が延安で成立した。康克清・蔡暢・張琴秋・徐明清・史秀雲・楊芝芳・丁玲ら17人が理事会理事となる。（中略）10月2日分会は第一保育院を設立。1939年2月保育院小学部は分かれて単独で学校を開設した」とある。また『年譜』に「陝甘寧辺区戦時児童保育院成立大会に出席，発言した」とある。『年譜』上巻，144頁。
- (9)日本軍機による最初の延安爆撃は1938年11月。同時期毛沢東と江青は結婚したとされる。
- (10)丁玲は1975年5月，5年間拘留された北京秦城監獄独房から釈放され，陳明と共に山西省長治市嶂頭村に移されていた。
- (11)魯迅芸術学院。丁玲はブダペストから帰国後，一時滞在した。
- (12)陳錦清（1921－1991）：浙江平陽の人。1937年蟻社救亡流動宣伝隊参加。翌年入党，延安魯芸戯劇系卒業。魯芸実験劇団を経て東北魯芸舞蹈班副主任。建国後，中央戯劇学院舞蹈団副団長。1954年より北京舞蹈学校副校長，北京舞蹈学院院長等歴任。『中国人名大詞典・当代人物巻』（以下『人名大詞典』）上海辞書出版社，1992年，1121頁。
- (13)張庚（1911－2003）：湖南長沙の人。1933年上海で左翼劇聯常委。翌年入党，独幕劇本『秋陽』及び多くの戯劇理論発表。抗戦期は蟻社で宣伝活動，1938年延安魯芸戯劇系主任。1943年魯芸工作団団長，論文「魯芸工作団對於秧歌的一些經驗」。1946年魯芸と共に東北へ，同副院長。1947年『秧歌劇選』。1949年より中央戯劇学院副院長，中国戯曲研究院副院長及び実験京劇団等を歴任。『中国芸術家辞典』現代第三分冊，湖南人民出版社，1982年，164－166頁，及び路聞捷・石広図・賈克勤主編『中国戯劇家大辞典』（以下『戯劇家大辞典』）中国戯劇出版社，2003年，600頁。
- (14)陳錦清の平壤留学は張庚の発意だったようだ。瀋陽魯芸設立前，東北で魯芸文工団第四団（陳は団員の一人）を率いて活動中だった1947年当時，張庚は「舞蹈は手薄な分野と感じ，朝鮮に崔成喜（原文ママ——引用者注）舞蹈研究所があると聞いて党南満分局陳雲の秘書に陳錦清を学びに行かせるよう話した所，上部の同意を経て（中略）彼女を朝鮮に送り届け，そこで半年間学ばせた」。安葵『張庚評伝』文化芸術出版社，1997年，139－140頁。
- (15)文士楨（1900－1981）：湖南省益陽の人。1927

年入党，モスクワ中山大学に学ぶ。38年帰国，湖南省委組織部部長。抗戦後，東北局駐朝鮮弁事処副主任，東北政務委員会駐朝鮮民主主義人民共和国商業代表团首席代表。51年帰国，瀋陽市委統戦部副部長を経て，52年長春東北地質学院院長兼党委書記。55年より中国国際貿易促進会副秘書長，中国国際旅行社副總經理等。1961年中ソ関係悪化により中国革命博物館副館長，63年湖南に戻り省政協副主席。『人名大詞典』217頁，及び<http://www.hnhs.gov.cn/zx/html/modules/news/print.php?storyid=492>参照。本文に後出する丁雪松のメモワールに「1948年末，元東北局平壤弁事処が取り消され，その後弁事処の基礎の上に東北行政委員会駐平壤商業代表团を組織した。代表は併せて4名で文士禎，倪蔚庭，丁雪松及び齊光であった」とある。丁雪松口述・楊德華整理『中国第一位女大使丁雪松回憶録』（以下『丁雪松回憶録』），江蘇人民出版社，2000年，176頁。

- (16) 光明小学は阜平県槐樹莊にあった。<http://jinchajiguangming.blog.163.com/blog/static/1356464732009112782549180/>「晋察冀光明小学的博客」参照。1945年9月丁玲夫妻は楊朔らと延安文芸通信団を組織し，東北で報道に従事すべく翌月子供二人を連れ延安を出発，年末張家口に到るが，国民党軍の交通封鎖により計画を変更，暫時『晋冀察日報』を拠点に活動することになった。この時祖林は華北聯大準備中の艾青に，祖慧は蕭三夫人甘露に預けられた。なお夫妻が土地改革に行くのは翌46年7月のことで，同年9月末張家口を出て10月初阜平県に到着する。『年譜』上巻，191－198頁。蔣祖林・李靈源『我的母親丁玲』遼寧人民出版社，2004年，127頁，及び前掲『我与丁玲五十年——陳明回憶録』「第三章在晋冀察（1945－1949）」にもそれぞれ当時の回想がある。

- (17) 聯合中学は張家口市立中学・女子中学及び回民

中学から構成され1946年秋設立。現・北京101中学の前身。<http://reading.cersp.com/DeepRead/Histroy/200607/2051.html>参照。文中の「ダム」は現・石家莊平山県崗南鎮ダム。

- (18) 梅蘭芳との交流は注(1)崔承喜関連資料参照。韓世昌（1897－1977）は著名な北方昆曲の女形，1945年崔と共に教材として中国古典舞踊7套を創作した。『中国芸術家辞典』現代第四分冊，湖南人民出版社，1984年，199頁。
- (19) 同年2月23日付丁玲から陳明への書簡に「妹妹（祖慧——引用者注）は間もなく出発です。（中略）となるとあの子は明日発つわけですが，私はちょっと別れがたいです」とあり，原注に「祖慧が平壤にダンスを学びに行くことを指す」とある。前掲『書語』141－142頁。また『年譜』に1949年3月「20日祖慧朝鮮平壤から手紙を寄こす。彼女はそこでダンスを学んでいた」とある。『年譜』上巻，240頁。当時旅程に数日を要したとして，祖慧の平壤行きは2月末から3月上旬と推測される。
- (20) 鄭律成（1918－1976）：朝鮮全羅南道出身。1933年中国へ渡り，南京で朝鮮義烈団革命幹部学校入学。翌年卒業後，抗日運動に投じながらピアノ・バイオリン・声楽を学ぶ。1935年朝鮮民族解放同盟参加。37年延安へ赴き陝北公学・魯芸音楽系に学ぶ。38年抗日軍政大学・魯芸の教員となり「延安頌」作曲。39年入党。『八路军大合唱』中の「八路军進行曲」（後出「中国人民解放军進行曲」の原名）は人口に膾炙した。42年丁雪松と結婚，華北朝鮮革命軍政学校教育長。45年朝鮮独立を機に帰国，朝鮮保安隊（のちの朝鮮人民軍）倶楽部部長，「朝鮮人民軍進行曲」等。朝鮮戦争勃発後，夫人の帰国に伴い中国籍取得。ついで前線に赴き「朝鮮人民遊撃隊戦歌」「中国人民志願軍進行曲」。51年帰国，主に中央楽団で作曲活動に従事し，300曲余を遺した。『中国芸術家辞典』現代第三分冊，

湖南人民出版社, 1982年, 351頁。関連文献に前掲『丁雪松回憶録』及び丁雪松等『作曲家鄭律成』遼寧人民出版社, 2009年再版, 王和平『向着太陽歌唱: 解讀鄭律成』中央編訳出版社, 2010年があるほか, 朝鮮独立運動における鄭の行跡については石源華著・崔福実訳・金勝一監訳『中国共産党与韓国独立運動関係記事研究』(韓・中文併記) 図書出版高句麗, 1997年に複数記載がある。

(21) 丁雪松 (1918-) : 四川巴県の人。1936年重慶で救国会参加, 翌年入党。1938年延安へ, 抗大・中国女子大学で学ぶ。陝甘寧辺区政府秘書, 中央西北局研究室研究員。1946年朝鮮華僑聯合総会委員長, 1949年春中国東北行政委員会駐朝鮮商業団代表, 同年9月新華社平壤分社社長。1950年帰国, 中央国際活動指導委員会弁公室主任, 國務院外事弁公室秘書長, 対外友好協会副会長等を経て, 初の女性大使としてオランダ・デンマークに駐在。『人名大詞典』12頁, 及び前掲『丁雪松回憶録』『付録年表』。

(22) 以下のエピソードを指すと思われる。1967年のある日『白毛女』公演に江青が文芸小組と共に審査に來た。中国では政府要人は閉幕の際に舞台で出演者を激励する習慣があり, 団員の要望を受け祖慧は江青に舞台に上がるよう頼むが拒否された。その後控室で, 文芸小組から以前命があった『南海長城』の修正について尋ねると, 江青は「知らない」と答えた。指示された日時や文書もあるがと説明するや江青は忽ち機嫌を損ね, 「全くおかしい, あいつら(金敬邁ら文芸小組) 当てにならない」と言った。のち祖慧は五七幹部学校に下放され, 「革命群衆」から江青が自分を批判したのは「丁玲の娘は横暴だ。面と向かって私に逆らい, 大衆を利用して舞台に上がるよう迫った」ためだと伝え聞いた。2003年香港鳳凰衛視の番組『魯豫有約』に祖慧氏が出演した際の発言。注(1)「蔣祖慧: 我

与母親丁玲」に一部記録がある。師永剛・張凡編著『樣板戲史記』作家出版社, 2009年, 240頁にも類似の言及がある。

(23) Web上の資料では遼寧バレエ団「梁山泊与祝英台」に参加した編導は「阿力」である。祖慧氏に確認した所記憶では「麗」だが, のち改名したかは不明とのこと。因みに「麗」「力」は中国語で同音。阿力は氏と同年同月の1934年10月生で黒竜江省ハルビン出身, 1950年崔承喜舞踊研究所に留学した。<http://www.jzjcn.net/newweb/showart.asp?id=50>参照。

(24) 于頴 (1931-) : 遼寧丹東の人。1946年丹東市放送局音楽訓練班入学, 翌年白山文工団で秧歌舞を学ぶ。1949年朝鮮留学, 同年入党。1950年人民芸術劇院舞踏隊(のち中国歌劇舞劇院)で学び, 翌年崔承喜舞踊訓練班参加。1961年『雷峰塔』編導・主演。1980年『紅樓夢』編導。『中国芸術家辞典』現代第一分冊, 湖南人民出版社, 1981年, 370-371頁, 『人名大詞典』25-26頁。

(25) 崔承喜舞踊の演目名は祖慧氏の呼び方に従う, 以下同。

(26) 朝鮮民主主義人民共和国建国は1948年9月9日。

(27) チョン・スウン著『崔承喜——激動の時代を生きたある舞踊家の生涯と芸術』ヌンピッ, 2004年(原文韓国語) 所収「年表」, 及び前掲『崔承喜の舞——継承と変容』所収「崔承喜の舞踊活動年表」等。

(28) 2010年3月現存の香餌胡同は, 中央戲劇学院のあるブロックから安定門内大街を隔て東西に延びているが, 北側は新しいアパートに建替えられている。南側に該当の建物があるか未詳。

(29) この卒業公演については前掲小林「崔承喜の足跡と創作舞踊への考察——中国と中央戲劇学院における資料を中心に——」に資料が紹介されている。

(30) 李淑君 (1930-) : 山東済南生まれ。輔仁大学

経済系を経て1951年舞研班入学，民族舞踊・バレエを学ぶ傍ら韓世昌・馬祥麟らに師事。1954年中央実験歌劇院，1957年北方昆劇院。『中国芸術家辞典』現代第三分冊，湖南人民出版社，1982年，151－152頁，及び『戲劇家大辞典』806頁。

(31)舒巧（1932－）：浙江慈溪の人。1944年新安旅行団で文芸宣伝に従事。1949年上海歌劇院俳優。1951年入党，舞研班入学。卒業後上海歌劇院。1955年戴愛蓮に師事，舞踊創作開始。『小刀会』『后羿与嫦娥』主演，『弓舞』編導。『中国芸術家辞典』現代第二分冊，湖南人民出版社，1981年，410－411頁，及び『人名大詞典』1997頁。

(32)李正一（1929－）：遼寧丹東の人。1949年中央戲劇学院舞踏団入団，翌年入党。北京舞踏学校中国古典舞踊教員，同院長等を歴任。『人名大詞典』757頁。

(33)王世琦（1930－）：天津薊県の人。1949年河北大学文芸部で戲劇舞踊を学ぶ。1950年中央戲劇学院舞踏団，翌年舞研班で学ぶ。1953年中央歌舞団ダンサー。1955年北京舞踏学校編導訓練班入学。1956年入党。1972年中央バレエ団，『魚美人』等創作。『中国芸術家辞典』現代第三分冊，湖南人民出版社，1982年，379－380頁。『龍騰澳州』を上演したのはオーストラリア華人組織・澳州僑青社。

(34)田正坤（1933－）：湖北武漢の人。1949年解放軍に参加，1952年舞研班卒業。中央戲劇学院副教授，形体教研室主任等。映画・テレビ・話劇俳優向けオリジナル形体教材を創出，『話劇形体基礎訓練教材』等。『戲劇家大辞典』283頁。

(35)王詩英（1932－）：湖北漢川の人。1948年四維戲劇学校卒業。1950年中国戲曲研究院実験戲曲学校研究生班學員，翌年舞研班参加。のち中国戲曲学院戲曲導演班等で教員。『戲曲旦行身段功』。『戲劇家大辞典』177頁。

(36)高金榮（1934－）：北京の人。北京師範大学付属小，燕冀女子中卒業。1951年舞研班入学，翌年寧夏省文工団（のち甘肅省歌劇団）舞踊教員。1959年蘭州芸術学院戲劇系教員。敦煌壁画の舞姿を研究，流派構築に貢献した。『敦煌舞踏』等。『中国芸術家辞典』現代第四分冊，湖南人民出版社，1984年，371－372頁。